

# リベリア 地域住民参加型の 再定住促進 プログラム

## Liberia



□ 首都  
● UNHCR事務所  
▲ 難民キャンプ



ヴォインジヤマからコラファンへの途上 UNHCR/K.Nagasaka

### 「WELCOME(お帰り)、 WELCOME、WELCOME…」

2005年6月16日の朝、ギニアとリベリアの国境を20数台のトラックが次々と通過していく。ギニアの難民キャンプから故郷へ帰還する人々を乗せたコンボイ（トラック隊）だ。この日は522名がリベリアに帰還した。

この後、コンボイは、リベリア北東ロファ県のヴォインジヤマ一時滞在センターへ。「WELCOME（お帰り）、WELCOME、WELCOME」。センターに到着するコンボイにNGO（非政府組織）パートナーの職員の声が響く。センターに着くと、帰還民はまず登録、健康診断を受ける。これら通常の手続きが済むと食事の時間。食事は魚、肉、野菜の煮込みをブルグア（ひき割り小麦）にかけてたもので、一緒に味見をさせてもらったが、これがなかなかの美味だった。十数年振りに故国に帰ってきた人々はどんな思いでこの最初の食事を摂っているのだろうか。

UNHCRは帰国後の必要な諸手続きを安全かつ円滑に行うため、リベリア国内に17か所の一時滞在センターおよび中継地を設置した。現在、6つのNGOがこれらの施設の管理にあたっている。その他、医療、子どもや女性

の保護などを専門とするNGOもコンボイが到着する度に職員を派遣し、援助を必要としている人々に対応する。ヴォインジヤマ一時滞在センターでは、他に地元の女性保護団体も活動している。さらに「帰還民向け支援物資のセット」の配布もここで行われる。ビニールシート、食器、ポリ容器、最終目的地までの交通費（一人につき5ドル）、4か月分の食糧などがその主な内容である。さらに遠隔地に帰る人々は、センターで一泊、翌朝UNHCRのトラックで目的地まで帰ることになる。

昨年10月に、リベリア難民および国内避難民の帰還計画が始まって以来、現在までに約2万3000人の難民（UNHCRの帰還手続きをふんだ者のみ、自力での帰還者は除く）と17万人の国内避難民が故郷に帰還した。



リベリア UNHCRモンロビア事務所  
上級計画担当官

### 長坂和敏

#### Profile

ながさかずとし  
1959年生まれ。創価大学で国際法の法学修士号を取得。1985年、JPOとしてUNHCRのスタン・ハルトツーム事務所に法務補佐官として派遣される。その後、タイ、スイス・ジュネーブ本部、カンボジア、再び本部での勤務を経た後、2004年11月より現職。UNHCRの職員になった理由は、大学で学ぶうちに、国連が実際にどのように世界の人々の幸福に貢献しているのかを体験したくなったから。



ヴォインジャマ一時滞在センターにて UNHCR/K.Nagasaki

UNHCRは、30を越えるNGOおよび他の国連機関との協力の下、リベリア各地での再定住促進プロジェクトも行っている。その内容は、再定住の進捗状況のモニタリング、住宅建設の支援、飲料水・食糧の確保、医療、教育、平和教育、職業訓練、人権保護、子どもの保護、性的および性差に基づく暴力の防止とその被害者の救済、地方政府機関や地域に根ざした公共団体の支援など、多岐に亘る。とはいえ、10数年に亘る戦火の影響は大きい。帰還する人々のトラック移送も、地域によっては、道路の状態が悪いためままならない。現金による交通費の支給はそのための代替手段でもある。道路ばかりでなく、司法制度や公共事業のほとんどが崩壊し、その復興には長い年月を要すると思われる。たとえば、性的暴力を受けた被害者の医療の面での対応はできても、その加害者の訴追をする制度は多くの場合無いに等しい。

### コミュニティ・エンパワーメント（能力強化）による再定住促進

UNHCRはこれら多くの分野に亘る活動の基盤として、コミュニティ能力強化プロジェクト（CEP）と呼ばれる方式を採用している。地域の活性化を狙いとした、帰還民を含む地域住民の参加を基本とするアプローチで、住宅の再建や学校の修復、井戸の建設、田畑の開拓など、UNHCRのフィールド担当官とNGOの指導の下、地域住民自身が計画立案し実施する。帰還した難民の再定住促進と同時に地域住民の自活能力を高めていこうとの試みである。UNHCRとNGOの撤退後も、地域活性化の活動が住民自身の手によって継続できるようにするのがその目的だ。また、地域レベルの「平和の定着」にも効果的に貢献しうるアプローチであり、日本の平和構築資金供与もその多くがこのCEP活動にあてられ、成果をあげている。

首都モンロビアからヴォインジャマへ向かう道の大半は未舗装道路で、その両側は鬱蒼とした熱帯雨林だ。が、よく見ると道路際の茂みの奥で田畑を耕す家族があちこちに見受けられる。これはCEP方式による食生活安定化プロジェクトの成果。太陽の光を反射してキラキラ光って見えるのは日本のNGOピース・ウィンズ・ジャパン（PWJ）が実施した住宅再建プロジェクトのトタン屋根。リベリアはこれから本格的な雨季に入るが、この集落の人々は雨漏りに悩まされずに済むだろう。家々の周りには家庭菜園が見られ、鶏が餌を啄んでいる。こうして生活を再建するために努力している帰還民の姿は我々にとっても大きな励みになる。

現在までに実施された、このようなCEPは1500件をこえる。今後は数もさることながら、その内容の充実をより一層図るよう、NGOと協議を繰り返す一方、FAO（国連食糧農業機関）やUN-HABITAT（国連人間居住計画）などの専門機関とも協力関係を結び、各専門分野の技術やノウハウをプロジェクトの実施に生かせるようにしていく予定だ。

一方で、UNHCRは小・中学校の再建、診療施設の再建・運営など、CEPの枠を越えた規模の地域復興のための支援活動も、各地で実施している。ヴォインジャマ公立小学校もそのひとつである。

「戦争前は、もっとたくさん子どもたちが来ていました。正規の教員も40人以上いたんですよ」と校長は言う。戦火の中で破壊されてしまっていたこの校舎もUNHCRとPWJとのパートナーシップでよみがえった。机や長椅子はユニセフ、給食はWFP（世界食糧計画）、調理は地元のボランティアのお母さんたち。正規の教員のほとんどがまだ帰還していないため、現在教鞭をとっているのは、ほとんどが地元のボランティアの人々だ。まさに国連、NGO、地域住民の共同事業。今では、1000人以上の子どもたちがここで学んでいる。そのほとんどがギニアやシエラレオネの難民キャンプから最近帰還してきた子どもたちだ。「学校は楽しい？」と聞くと「YES！（うん）」と元気な笑顔が返ってくる。「宿題は好き？」「NO！（ううん）」「難民キャンプとヴォインジャマと、どちらが好き？」「HOME（故郷）!!!」

一時滞在センターでの受け入れ作業中のこと。私の傍らにいたUNHCRの職員の一ひりが妙に緊張し、そわそわし始めた。どうしたのか聞いてみると、今トラックから降りた帰還民のなかに自分の息子がいた、と言って駆け出す。まもなくその息子さんを連れて戻ってきた。久しぶりの再会にちょっと緊張気味の父子。わが事のように喜ぶ他の職員たち。何とも嬉しい光景だった。